

房総の 文化財

VOL. 15

平成10年3月10日

財団法人 千葉県文化財センター

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai



発掘調査速報

古代の役所跡 — 成東町嶋戸東遺跡 —

嶋戸東遺跡は、成東町の北に位置する島戸地区にあります。遺跡の付近には数多くの古墳のほか、今から1,200年ほど前に創建された真行寺廃寺があります。この寺跡からは「武射寺」と書かれた墨書土器が出土し、律令時代にこの地域に置かれていた武射郡の郡寺*と考えられています。全国各地の調査例では、郡寺は郡の役所である「郡衙」の近くに設置される場合が多く、この地域は古くから注目されていました。最近の調査で、奈良や京都などの寺院に見られる回廊のような掘立柱建物跡も見つかっています。

このように、古代の役所跡が存在する可



能性が高くなったので、平成9年10月から1か月間、確認のための調査を行いました。その結果、多数の奈良・平安時代の掘立柱建物跡、倉庫を建てるために地盤を突き固めた基壇跡を確認することができました。中でも注目されるのは、3間×5間の大型の掘立柱建物跡です。ほぼ同一の場所で何回か建て替えられていました。東西18m、南北7～8mの規模をもち、東西の柱穴の間隔は3.6m（12尺）もありました。柱穴は四角形で、1辺が1.5m以上の大きさ、深さは最も深いもので1.7mでした。柱の太さは40cmほどと考えられ、電信柱並の太さです。長年、発掘調査を行っていますが、大きさに圧倒されてしまいました。規模が大きく、方向が同じ向きになるなどの規格性のみられる掘立柱建物跡や、基壇跡が存在することなど、今回の調査で郡衙のあった可能性がさらに高くなったと言えるでしょう。

(小林信一)



大型の掘立柱建物跡（東から）

*郡寺：郡衙からほど近い場所に置かれた寺で、郡の長官である郡司の氏寺の系譜を引くものが多い。

収蔵遺物コーナー

縄文時代草創期の“証” — 東金市大谷台遺跡 —

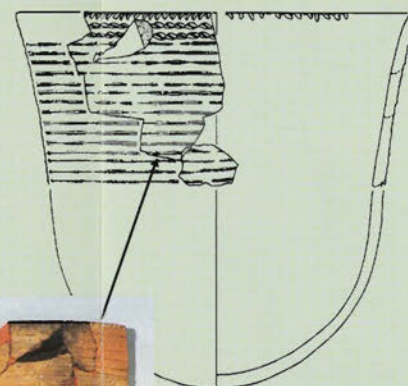
縄文土器は今から12,000年ほど前に作りはじめられたと考えられています。しかし、その始まりの時期の様子となると遺跡も少ないためまだまだわからないことが多く、なぞに包まれています。そのため、新たな発見のニュースがあれば、それがどんなに小さな土器片であっても、全国レベルで注目されることとなります。

今回紹介する遺物は、そうしたなぞの時代の土器です。東金市の大谷台遺跡は市の北西部の八街市との境に近い、馬の背状のやせ尾根に位置します。そこから、縄文時代「草創期」の微隆起線文土器と言われる土器が発見されました。ミミズ腫れのような極めて細い線を土器の器面にめぐらせた土器で、ヘラのような工具を強く押しつけ

て紋様をつくります。微隆起線文土器は、草創期の土器でも最も古い段階に位置づけられるものです。県内では鎌ヶ谷市林跡遺跡、印西市地国穴遺跡、印旛村瀬戸遠蓮遺跡、多古町一鉄田甚兵衛山南遺跡（空港No.12遺跡）、市原市南原遺跡、富津市前三舟台遺跡など指折り数えるほどしか知られていません。全国的にも青森、山形、茨城、東京、神奈川、新潟、長野など日本の北東部の都県で数遺跡ずつ見つかったり、ほかに長崎県の洞窟遺跡からも出土しています。大谷台遺跡からは、残念ながら住居跡は見つかりませんでしたが、はるか昔の私たちの先祖の活動の跡を示すものとして、大変貴重なものと言えます。

(安井健一)

復元図



大谷台遺跡出土の縄文時代草創期の土器片



微隆起線文土器の器面（拡大）

遺跡今昔物語

歴史をふりかえる新しい道

千葉東金道路は、東金インターチェンジから横芝町まで延長されることになり、平成10年3月の開通をめざして工事が進められています。

計画された道路敷地には、古墳や集落跡など38か所の遺跡があったため、平成5年から順次発掘調査を行いました。昨年8月までにすべて調査が終了し、現在は出土品の整理作業を行っています。

道路幅の調査なので、遺跡の全体像を明らかにすることはできませんが、旧石器時代から近世までの貴重な資料が得られ、遺跡の概要がつかめてきました。

さて、どのような昔の姿が見えてきたのでしょうか。調査された主な遺跡の様子を紹介します。

(石塚浩)



工事中の千葉東金道路

小川崎台遺跡

●古墳が4基造られた。そのうちの前方後円墳1基には、人物・馬・家をかたどった埴輪が並べられた。（有力な豪族がいたのでしょうか）

大谷台遺跡

●縄文時代の草創期から前期にかけてこの地を訪れた人々がいた。（くわしくは「収蔵遺物コーナー」をご覧ください）

板橋遺跡

●江戸時代、幕府によって佐倉七牧の一つ小間子牧が経営され、牧場から馬が逃げるのを防ぐための土手が築かれた。

前畑遺跡

●奈良・平安時代にはムラができた。
●室町～戦国時代、幅4mもある堀をもつ屋敷が建てられた。付近には共同墓地が造られた。（堀にかかる橋を往来したのはどんな人たちだったのでしょうか）



四ツ塚遺跡

四ツ塚遺跡

●旧石器時代（3万年前）に石器作りが行われ、2か所の環状ブロックが形成された。（大型の動物の狩りをするために、たくさんの人々がこの地に集まり、石器を加工していたのでしょうか）

赤羽根遺跡

●旧石器時代（2万5千年前）に、人々が訪れ、遺跡の崖下にある礫層から大量の石を取った。（この石から石器を作っていたのでしょうか）
●縄文時代草創期に人々が訪れた。（大谷台遺跡によく似た微隆起線文土器が見つかりました）

松尾・横芝インターチェンジ

●古墳時代後期から平安時代にかけてムラができ、竪穴住居と掘立柱の建物が約130軒も建てられた。（はたして、その後ムラはどこへ移っていったのでしょうか）

栗焼棒遺跡

●古墳時代から平安時代にかけてムラができた。その中にほかの住居よりもずっと大きな掘立柱建物が建てられた。（ムラにとって大切な場所だったのでしょうか）

大山遺跡



埋文アラカルト

木製品のいろいろ 又また鋤ぐわ

スコップでも鋤でも、木製の柄えに鉄製の身をつけたものが今は一般的です。しかし、少し前までは刃先だけ鉄製のものが主流で、さらに古くは刃先まで木でできていました。今回取り上げたのは、刃先まで木製の鋤のうち、刃先がいくつかに分かれている又また鋤ぐわです。市原市の市原条里制遺跡いちばらじょうりせいの弥生時代中期の畦畔えあなから見つかりました。ところで、身に穴をあけて柄を挿しこむ柄穴鋤えあなぐわに対して、身と曲がった柄とを紐で縛って固定するものを曲柄鋤まがりえぐわといいます。これは、柄の部分が残っていませんが、曲柄又また鋤ぐわの身の部分と思われます。刃先が四つに分

かれた四又よつまたぐわ鋤で、水田を耕すのに使われたものでしょう。長さは約50cmです。
(川島利道)



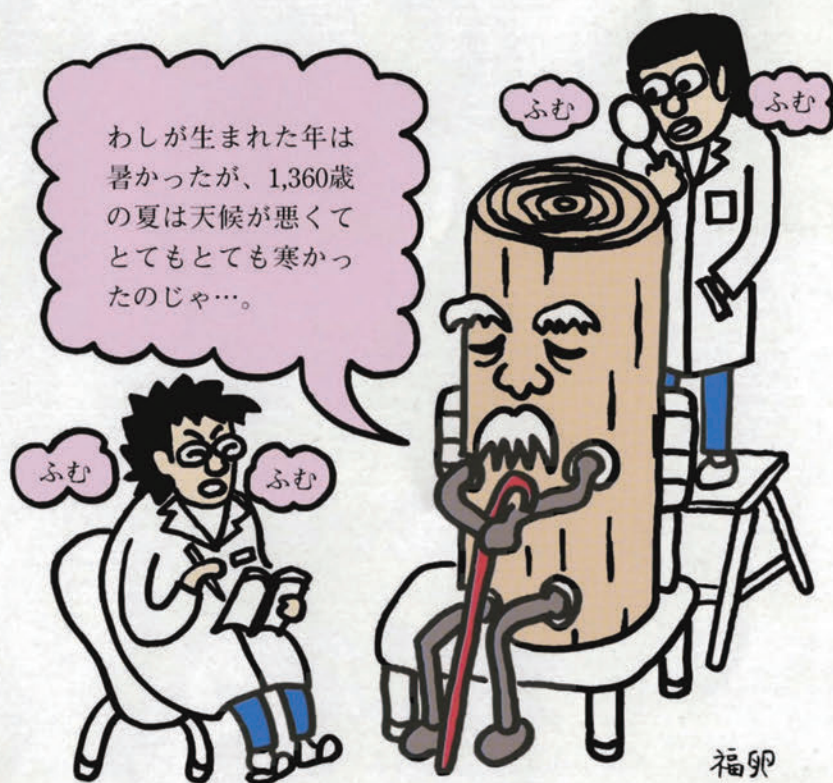
又鋤出土状況

Q&A

Q 樹木の年輪から遺構や遺物の年代がわかると聞きましたが、どうしてわかるのですか。

A 樹木の年輪には、樹木の一年ごとの成長の跡が反映されています。たとえば、寒くて雨が少ないときはあまり成長しないので年輪の幅が狭く、暑くて雨が多い時にはよく成長するので年輪の幅が広がります。このように年輪の幅から気象の変動を読みとることが可能で、その幅の移り変わりのパターンを実年代のわかっている資料と比べることで、建築材などに使われている木が伐り倒された年代を知る方法です。大阪府池上曽根遺跡いけがみそねの大型建物のヒノキの柱を調べたところ、その伐採された年代と遺跡の推定年代とのズレが確認され、弥生時代の実年代が今までの想定より約50年から

100年さかのぼるのではないかと問題提起され話題になりました。今のところヒノキやスギの場合、紀元前1,000年（今から3,000年前）ぐらいまでは調べることが可能です。



福卵

(川島利道)